

# 保育者養成と子育て支援について考える

河野利津子

## はじめに

我が国では、家庭の教育（保育）機能の低下が言われるようになって久しいが、とりわけ若い親たちの育児の不安を軽減して、子育てを側面から支援していこうとする行政の施策が進んでいる。

従来は、家庭の中に祖父母もおり子どもの数も多く、地縁に支えられて、決して孤独とはいえない共同の子育ての土壌があった。最近、核家族化が進み、母親たちは氾濫する育児の知識・情報に戸惑いながら、身近に頼る者も少なく、我が子の育児に自信がもてず孤軍奮闘しているといった状況が特徴であろうか。

1980年代以降、母親の育児不安や育児ノイローゼといった問題がクローズアップされるようになり、現在も実親や義理の親による幼児虐待や幼児殺しの事件も後を絶たない。そのような親たちには、彼らの生育歴の中に原因を見ることができるといえる場合が多いのも事実であるが、我が子を所有物かペットのように可愛がる親たちと同様に、育児を個人的問題としてのみ捉え、社会の子として社会全体で責任もつべきだと捉える視点が欠如しているともいえる。

子どもを生み育てることは、次世代を継承する人づくりであり、何時の世でも、人としてのごく当たり前の営みであったはずが、生むか生まないか、あるいは、いつ何人欲しいかを決めることにも殆ど疑問をもたぬ時代になっている。子育てには無論大きな責任を伴うが、親世代が子ども世代と「共に生きることを楽しむ」という視点、共に生きることを通して「親世代も人間（親）として成長していく」という視点が基本的に子育てには重要であると考えられる。

この小稿では、保育者養成に携わる立場から、どのような保育士が社会から必要とされているのか、親の子育てを支援するとはどういうことかを再度見つめ直して見たい。一昨年、中四国・九州地方の市教育委員会を対象に実施した調査の結果があるので、行政がこれからの親教育をどう考えているのか、その内容を参考にしつつ、保育士養成の立場から子育て支援のあり方を考えてみたい。

## 1. 親教育を通して子育て支援をするということについて

調査の回答の中に「教室や講座を開いても参加者が得られない」「必要だと思われる人が参加してくれない」「家庭教育のマニュアルは作ろうとしてもできないと思う」「家庭教育は大切だといわれながら（成人の教育は）踏み込むことが難しい」など、親（成人）の教育の難しさについての意見がかなり見られた。

我が国の行政は戦後まもなくから、各市町村の公民館や学校において、社会教育の一環として家庭教育学級などの講座を開いて、親や将来の親に子育てに必要な知識や技能を提供してきている。子どもの発達や年齢、あるいは親のニーズや興味に応じて、受講したい人がその教室・講座・講演等に参加できる仕組みになっているわけで、あくまで親の主体性に委ねられている。つまり行政が場所や講師（指導者）時間の設定はするけれども親たちに参加は強制できないのである。学校教育とは異なり、社会教育である成人（親）の教育には自らが必要性を感じ、学ぶ意欲や姿勢がなければ学ぶ機会はないのである。

家庭教育には方程式や解答はないわけで、それぞれの家庭でそれぞれの親の考え方・方法で実践していくものである。したがって第三者、例えば行政などが強く踏み込めない領域であるともいえる。何かことが起こった時の「我が子のしつけは我が家で」といった考え方は、責任を持つべきは、最終的にはその家庭でありその親であることを示している。

つまり子育て支援とは「親がする」子育てを支援・援助することであり、親の代わりになって子育てをすることではない、たとえ親から隔離せねばならない例外はあるにしても、である。親が毎日の育児を負担、しんどい、つまらないなどと思わないような子育て、即ち子どもの成長が楽しい、喜びであると感じられるような援助のあり方が望まれる。

保育者、とくに保育所保育士は、「日々保育に欠ける」乳幼児を長時間、保護者に代わって保育（育児）する。最近では、保育所は働く親の保育ニーズに応えるべく長時間（延長）保育、休日保育などを充実させてきている。しかし一方で、親の就労支援のための過大なサービスが、子どもたちが親の元で過ごす家庭での時間を奪ってはいないだろうか？ そのようなサービスが親から子育ての喜びや楽しさを奪っていないだろうか？ 保育者として日々の保育の中で、子どもの発達を見守り保障していく中で、働く親たちが子育てに喜びをもてるような、生き甲斐や働き甲斐になるような支援がしたいものである。

## 2. 親になることが困難な時代に子育てを支援すること

「子どもが子どもを育てている現状がある」「親になるべくしてなっていない親が多く、取り返しのつかないことをやっている」「もっと町内のおせっかいさんを育てる必要がある」などが今回の調査回答にも見られた。現代の母親の多くが育児体験のないままに子供を産み、我が子の育児に右往左往しているのではないか、育児不安や虐待の根源に、親にはなったもの子ども（赤ちゃん）や育児について何も知らない

という現実があるのではないか、などの指摘がある。

少子化が進んでいる昨今、弟や妹の世話などを通して実際の育児を体得したり、赤ちゃんが育っていく道筋を目の当たりにする機会などに殆ど恵まれていない。我が子をもって初めて、あやし方も分からず泣きやまない乳児に戸惑ったり、授乳やおむつ交換などに直面するわけである。豊かな時代である今日では、若い親の親たちもまた、子どもに家事や家業を手伝わせる気も必要もなく、そういった家庭環境で子どもたちはますます“子育ての文化”からは縁遠くなっていく。

最近耳にすることも多い「できちゃった婚」の是非はともかくとして、親になることの意味や自覚のないまま子どもを産み、育てねばならない状況になる若者もますます増えている。まさに‘子どもが子どもを育てている’というのが実態であろう。晩婚化の現状と同様に、こういった‘早婚によって親にならされている’ところにも問題があるのではないか。欧米でも生徒や学生であるティーンエイジャーの妊娠・出産に、地域や学校をあげて指導や対応をしているが、このような若い親への教育介入は社会教育としての対応だけでは間に合わなくなってきている。

最近では、そのような現状を踏まえて、中学や高校での授業やボランティアとして、保育所などでの保育体験や実習が取り入れられてきている。最初はおっかなびっくりの中高生たちも‘お兄ちゃん’‘お姉ちゃん’と慕われて遊んだり世話をかって出る中で、子どもをかわいいと思ひ責任の大きさを感じ取っていく。というわけで、受け入れ側の保育所でも、保育体験の意義を痛感しているようである。親になってからでは遅いという問題の解決に、こういった保育体験は効果を上げているように思われる。

親というものは最初から存在するのではなく、子どもを育てていく（共に育ちあう）過程で親になっていく（させてもらう）ものである。しかしよく言われるように、親のレディネス、準備性というものは親であることの自覚や育児

姿勢に大きく関わるものである。現代は、放っておいては子どもと関わるのが少ない社会的環境にあるが故に、親になる前に、子育てについての学習機会を作らねばならない。

また、昔はたくさんいた地域の「おせっかいさん」も、今となっては子育て支援のための貴重な“人的資源”である。自分の親や祖父母も含めて、近隣の育児経験の先輩に、子育てのアドバイスを受れたり、子どもを預かってもらうといった経験はもっと大切にしていきたい。親は確かにその子どもの責任を負うべきであるが、親一人で子育てを担うべきだということではなく、子どもが社会や地域の中で支えられて共に育つことを保障していくという意味での責任である。親が地域の人的資源を、気軽にかつ豊かに活用できるような支援体制を構築することも重要である。家庭を中心とした閉鎖的な育児が母子関係をゆがめて母親の心身のストレスを増大させること、そのことが子どもの発達にも影響を与えていること、最悪の場合、幼児虐待や子殺しにも至ることは希なケースではなくなっている。育児を親が一人で背負ってしまうことの無いよう、保育所や幼稚園は、その意味でも、子育て経験者や小中高生も気軽に子どもと交流（体験やボランティアなど）できる地域の子育て広場でありたいものである。

### 3. 親＝成人の学習の方法（形態）を考える

今回の調査結果で、行政側の課題として最も多く指摘されたのは、親教育の方法（形態）についてであった。つまり、親（成人）の学習は、学校教育のような一斉に知識や技能を教えるといった講義や受け身的なものよりも、自由でインフォーマルな形態で、自主的に、必要なことが学び取れるようなものを望んでいるということである。より具体的には、1)互いに情報交換ができて、2)先輩の体験談が聞けたり、3)相談が気軽にできて、4)親子で活動できる、5)パネルディスカッション的な場であり、6)多くの出会いがあり、7)託児をしてもらえる、など「参加型」「体験型」「交流型」「井戸端会議型」の学習を希望する傾向にあるといえる。

親たちの多くは育児をする中で心配事があるので相談をしたい、他の母親はどうやっているのか知りたい等、個別に具体的な悩みや関心をもっている。ゆえにむしろ専門家から講義形式に知識や原理原則を教えてもらうというよりも、自分のケースで具体的にかつ直接的に、回答や解決策を望んでいるのである。また、親同士のざっくばらんな意見交換や親子での楽しい交流を通して、他の親子関係やかかわりを見ることにより、客観的に我が子や自らのかかわりを見つめ直す機会になっているのである。子育ての心配や悩みは誰もが大きなり小なり抱えているということを知ったり、‘私だけではない’‘うちの子ばかりではない’ことを知ることは子育てに大きな安心感や自信を与えてくれるものである。

専門家による講義や講演会で子育ての原則を聞いて、余計に自らの育児の至らなさに不安になってしまう、ということをよく耳にする。我が子の子育てには唯一の回答や正解などはない。親が一人ひとりの子どもに合った適切な対応を試行錯誤していくものであろう。つまり親がマニュアル化された基準（平均）を教えてもらう＜縦の関係による＞学習ではなく、親同士の情報交換や話し合い、仲間づくりなどから自らの育児や親子関係を振り返りながら学び合えるようなく横の関係による＞学習が有効なのであろう。

そのためにも子育て支援をしていくための姿勢として、あくまでも親が自ら考えて解決する主体であることを忘れないようにしたい。保育所が地域の子育てセンターであるという意味をもう一度考えよう。保育士が親に対して「○○してください」と直接指導したりお願いしたりということも保育現場では多い。しかし何といても我が子を長期に渡って育てていくのはその親である。保育者は、保育所保育というモデルを通して、親に子どもとのかかわりや対応の仕方を見直してもらう、あるいは保育所が、他の子どもの育ちや親子関係を見て子育ての方法を学ぶ絶好の機会（場）である、という自覚が大切ではなかろうか。

#### 4. 父親の育児役割の重要性について

親教育の場では、「子育て」や「しつけ」が母親の仕事と考えられてきたために、父親の参加が得られにくいという実態がある。

今回の調査でも、「平日午前中という時間帯ではまず父親の参加は皆無である」「父親参加については期待しないし又できない」「PTAで子育ての父親部があっても良いのでは」、「母親が主導権を持っているから母親を通して父親の子育て意識を変えていく方が良い」「夫婦共に考えて一緒に取り組む子育てができるような親教育を」など、父親参加への指摘が多くみられた。講座やプログラムの開講時間等の問題もあるが、父親を対象とした子育ての学習が難しい現状が指摘される。

少子化・核家族化傾向と共に、夫婦共働き家庭も増加している昨今、子育ては夫婦で協力して行わねば当然母親に負担が大きくなる。世間的には子どもが幼いときは母親と一緒にいることが重要で、父親の出番は（子どもの）話が分かるようになってから、という認識がまだ強いのではないだろうか。妊娠期や出産も二人で乗り切ったというような夫婦は、子育ての悩みも楽しみも共有できることが多いであろう。特に専業主婦である母親の場合、毎日24時間の育児の煩わしさと責任の重圧で育児が楽しいと思えない、あるいは育児不安やノイローゼといった状況に陥りやすいことはよく言われることである。

保育所に預かる子どもたちについては、その多くが一日の半分近く（10-11時間）を親から離れて保育されているため、親たちからみると仕事での疲労はあれども、毎夕の子どもとの再会は待ち遠しく、嬉しいものである。親たちにとって保育士は、育児の不安をたちまち解消してくれる頼もしい存在であろう。また、共働きの親たちは、概して母親の方がより仕事と育児の二重負担に苦しむ実状ではあれ、基本的には、

忙しい夫婦が同じ立場で子どもと向き合い協力して育児ができる環境にあるかもしれない。専業主婦の母親の家庭と比べて、夫婦で育児をより共有しうる状況にあるともいえる。

育児を母親の天職、専売特許としないこと、夫婦で子育てをしていく意識と態度が何より必要である。父親（夫）からの「子育ては（母親の）おまえに任せた」という言葉は、母親にとって、特に初心者マークの母親には不安と重圧以外の何ものでもなからう。一緒に考えたり悩んだりしてくれる育児の最大かつ強力なパートナーは、まず父親であることを忘れてはならないだろう。

#### おわりに

以上、親教育に関する調査を基に、親教育の視点から子育て支援のあり方について考えてみた。

地域の子育て支援が保育所や保育士の重要な職務になってきている現在、保育所児か家庭保育児かに関わらず、親がゆとりのある楽しいと思える子育てができるよう助言や援助をしていくことが求められている。

保育士養成の2年は、現場の親の抱える悩み相談や対応への知識・技能の学習を保障している期間であってほしい。保育士としての様々な経験、むしろその専門性や磨かれた人間性、あるいは自らの親としての経験などが総体として親への理解や共感を深めていくのではなかろうか。子育て支援とは、さまざまな状況にある親に対して理解や共感をもち、子どもと親が共に育つ関係を支援することである。養成校では幅広く多様な学習を通して、福祉に携わる者としての基本的な姿勢、福祉の心を学び、保育者＝子育ての援助者としての専門性や人間性にますます磨きをかけたいものである。

(助教授)